

各 農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー 所 長 様
 各 農 業 協 同 組 合 長 (営 農 担 当 者) 様
 各 農 業 関 係 機 関 長 ・ 団 体 長 様

京 都 府 病 害 虫 防 除 所 長
 (公 印 省 略)

病 害 虫 発 生 予 察 情 報 に つ い て

下 記 の と お り 発 表 し ま し た の で 送 付 し ま す 。

病 害 虫 発 生 予 報 第 3 号 (5 月)

予 報 の 概 要

| 作 物 名 | 病 害 虫 名 | 予 想 発 生 量 < 平 年 比 (前 年 比) > |
|-------|--|--|
| イ ネ | ヒメトビウンカ 縞葉枯病 イネミズゾウムシ | 並 (並) 並 (並) 並 (並) |
| 果 樹 | ナシ黒斑病 ナシ黒星病 カキ炭そ病 | やや少 (並) 並 (並) 並 (やや少) |
| チャ | チャノコカクモンハマキ クワシロカイガラムシ | 多 (やや多) 山城 : やや少 (やや少) 丹波 : 多 (多) |
| 野 菜 | アブラムシ類とモザイク病 キャベツ菌核病 コナガ (キャベツ、ハクサイ) ネギさび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ | 並 (並) やや多 (やや多) 少 (少) 並 (並) やや少 (やや少) やや少 (少) |

平 年 と は 過 去 1 0 年 の 平 均 で あ る 。

用語の定義

1 半旬のとり方

| | 第1半旬 | 第2半旬 | 第3半旬 | 第4半旬 | 第5半旬 | 第6半旬 |
|-----|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 各月の | 1～5 | 6～10 | 11～15 | 16～20 | 21～25 | 26～最終 |
| | 日 | 日 | 日 | 日 | 日 | 日 |

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

| | |
|------|-----------------|
| 平年並 | 平年値を中心として前後2日以内 |
| やや早い | 平年値より3～5日早い |
| やや遅い | 平年値より3～5日遅い |
| 早い | 平年値より6日以上早い |
| 遅い | 平年値より6日以上遅い |

2) 量(発生量、発生面積等)

| | |
|-------|----------------------------------|
| 平年並 | 平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量 |
| やや多い | 「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量 |
| やや少ない | 「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量 |
| 多い | 「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量 |
| 少ない | 「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量 |

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

イネ

1 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年並（前年並）
縞葉枯病 平年並（前年並）

予報の根拠

（１）４月第３半旬現在、ヒメトビウンカの発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- （２）縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生は散見される程度まで減少している。

2 イネミスゾウムシ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）前年の新成虫の予察灯への飛来数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。５月中下旬から卵を産む。
- （２）ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- （３）イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- （４）浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- （５）粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法で防除ができる。
- （６）育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり０．３頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 苗立枯病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- （２）低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- （３）出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

4 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）病原細菌は種子伝染するため、塩水選と種子消毒を必ず実施する。

- (2) 出芽時の温度は 3 0 を基準とする。ただし、加温しない育苗は 1 0 ~ 3 0 の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

5 苗もち

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い、塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

種子消毒について

平成 16、17年の調査で **MBI - D 剤耐性いもち病菌** が一部地域で確認された。耐性菌の頻度低下と拡大防止のため、健全な種子を用い塩水選と **種子消毒** を必ず行う。

MBI - D 剤：カルプロバミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

ムギ

ムギ 赤かび病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 開花期から 2 週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよそ 1 週間後である。
- (2) 防除最適期は開花初期～開花最盛期であり、防除を徹底する。農業総合研究所作物部の調査では、小麦の出穂期は、平年比 4 , 5 日遅いので注意する。
- (3) 六条大麦は特に発生しやすい。
- (4) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 越冬病原菌量は、平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 小袋掛け前に、病斑のある果実は摘果し防除を徹底し、速やかに小袋掛けを行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）前年秋期の巡回調査では、発生を認めていない。
- （２）向こう１か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）果実では、幼果の時に感染する。
- （２）芽の基部に病斑が生じた枝は、切り取り処分する。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）前年秋期の巡回調査では、発生を認めている。
- （２）向こう１か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。
- （２）新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた場合は、速やかに切り取り園外の土中に埋める等処分する。
- （３）５～６月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

4 カキ フジコナカイガラムシ

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）通風のよくない園で発生が多くなる傾向がある。
- （２）前年カメムシ類等の防除に、合成ピレスロイド系薬剤を多く使用した園で発生しやすい。

5 ブドウ 灰色かび病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は２３前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- （２）ジベレリン処理したものは、開花終了後に花がらを落とす。
- （３）ハウス栽培では換気に努める等、予防を徹底する。

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

幼虫ふ化時期：５月第６半旬～６月第１半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は、平年比やや多かった(+)。
- (2) 4月中旬現在、発生量は平年比多い(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

2 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない(前年比やや少ない)
丹波 平年比多い(前年比多い)
幼虫ふ化時期：5月第6半旬～6月第1半旬(平年並)

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は、山城で平年並、丹波で平年比やや多かった(+)。
- (2) 4月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく(-)、丹波で平年比多い(+)。
- (3) クワシロカイガラムシ発生予察モデルによると、第1世代のふ化最盛日は平年と比べ1～2日早いと予測される。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回(一部山間部では2回)発生する。ふ化した1齢幼虫は、まだ口吻物質で覆われておらず、移動することができる。また、5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この時期のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。
- (2) 発生は園により差があるので、毎年発生し前年に適期防除できなかった園では注意する。なお、標高の高いところでは、ふ化が10日程度遅れる。
- (3) 多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

3 その他の病害虫

灰色かび病

広域で本病の発生を認めた。春先の気温上昇と湿潤条件が影響したと思われる。また、花が感染源となることが知られている。

発病葉が落葉し樹勢が低下することもあるので、肥培管理等に注意する。

野菜

1 アブラムシ類とモザイク病(ナス、トマト、トウガラシ、キュウリなど)

予報内容 発生量：平年並(前年並)
予報の根拠

- (1) 4 月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 4 月第 3 半旬現在、黄色水盤への飛来数は例年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) 定植時のシルバーストライプマルチは有翅虫の飛来に忌避効果がある。

2 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 4 月中旬現在、発生を認めている。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は 20 前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で 2 ~ 3 年間生存可能である。

3 コナガ(キャベツ、ハクサイなど)

予報内容 発生量：平年比少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 4 月中旬現在、発生量は平年比少ない(-)。
- (2) 4 月第 3 半旬現在、フェロモントラップへの飛来量は平年比少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。

4 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 4 月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう 1 か月の気温は平年並または高く(-)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 春に比較的低温で、降雨が多いと多発する傾向がある。

5 ネギハモグリバエ(ネギ)

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 4 月中旬現在、発生量は平年比少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬し、成虫は4月中旬頃から発生する。年間5～6世代繰り返す。
- (2) 比較的砂地の土壌で発生が多く、5～6月に少雨の年に多発する。

6 ネギアザミウマ(ネギ)

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

7 トマト黄化葉巻病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus)の感染により引き起こされる病気である。昨年12月に府南部のハウス栽培トマトで発生が確認された。
- (2) シルバーリーフコナジラミを介して伝染するので、シルバーリーフコナジラミの発生状況に注意する。
- (3) 苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
- (4) 発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。

1月4日付特殊報第3号及び2月24日付資料「トマト黄化葉巻病について」を参照のこと

残留農薬のポジティブリスト制度について

5月29日から残留農薬値が設定されていない農薬等が一定量以上含まれる食品の販売等を原則禁止する制度（いわゆるポジティブリスト制度）が施行されます。この制度が実施されると、残留基準が設定されていない農薬や作物に対して、農薬取締法に基づく基準、国際基準等を参考にした「暫定基準」が、基準のないものには極めて低い基準値「0.01ppm（一律基準）」が適用されます。

隣接作物に散布された農薬の飛散（ドリフト）があり、設定された一律基準値を超えて農薬が残留する場合、その作物は出荷停止になります。

農薬の散布に当たっては、農薬使用基準を遵守し、飛散のないよう、これまで以上に注意してください。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

また、調査結果については防除所FAXサービス（0771-23-6539）をご利用下さい。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホムペジの「農薬コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

< 参考 >

近畿地方 1 か月予報

（4月15日から5月14日までの天候見通し）

平成18年4月14日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう1ヶ月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるとでしょう。

向こう1か月の気温は平年並または高い見込みです。降水量、日照時間は共に平年並の見込みです。

週別の気温は、1週目は平年並、2週目は高く、3～4週目は平年並の見込みです。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％） >

| | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 20 | 40 | 40 |
| 降水量 | 30 | 40 | 30 |
| 日照時間 | 30 | 40 | 30 |

農業改良普及センター 電話番号一覧

| | | |
|-------|------------|------------------|
| ・京都乙訓 | 農業改良普及センター | 075 - 315 - 2906 |
| ・山城北 | 農業改良普及センター | 0774 - 62 - 8686 |
| ・山城南 | 農業改良普及センター | 0774 - 72 - 0237 |
| ・南丹 | 農業改良普及センター | 0771 - 62 - 0665 |
| ・中丹東 | 農業改良普及センター | 0773 - 42 - 2255 |
| ・中丹西 | 農業改良普及センター | 0773 - 22 - 4901 |
| ・丹後 | 農業改良普及センター | 0772 - 62 - 4308 |

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771 - 23 - 6442
- ・FAXサービス
0771 - 23 - 6539
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621 - 0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-9513